

ヘアリーベッチ跡コシヒカリ栽培の安定

大津・南部農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

大津市南部の集落営農組織では、平成 20 年産米からヘアリーベッチ（HV）を緑肥とした栽培に取り組み、JA レーク大津が「はなふじ[®]米」と名付け JA のトップブランドとして販売しています。

生産者限定で生産量も限られる一方で、消費者ニーズも高いことから、毎年早い時期に販売終了となり、増産が課題となっています。ところがHVの肥効の安定化が難しく、平成 23 年産は慣行栽培（環境こだわり基準）に比べて 2 割程度減収しました。このため、昨年度調査研究でより適切な栽培管理の検討を行った成果を今年度現場で普及し、少しでも増収を目指すことにしました。



【普及活動の内容】

H23 年 10 月のHV 播種研修会、H24 年 4 月のHV 鋤込み研修会では、右の内容を指導しました。データを示しながら理由をきちんと説明することで、農家に理解してもらい、納得して実践いただけるよう心がけました。

指導した結果の実践状況は、チェックリストを活用しながら農家の聞き取りや、JA と巡回するなどして確認を行いました。

< 栽培管理のポイント >

- HV 播種時期を遅らせ 11 月上中旬に（4 月下旬頃に HV 生育量が適量となるよう）
- 鋤込み量に応じ入水までの期間を調整（HV 鋤込量が多すぎた場合の倒伏防止が可能）
- 栽植密度を 50 60 株 / 坪に（不可避な初期生育抑制を栽植密度でカバー）
- 中干し適正実施（還元障害の軽減）

【普及活動の成果】

昨年度は地域慣行となっている緑肥を使用しない環境こだわりコシヒカリに対し、はなふじ米は平均 22% 減収でしたが、今年度は平均 7% の減収でとどまりました。

また、はなふじ米の面積は年々増加していますが、平成 25 年産の予定作付面積は、グラフの通り、さらに前年比で 1.7 倍に増加する見通しです。

生産者に定着したはなふじ米ですが、まだまだ消費者ニーズを満たせていません。生産が安定して継続できるよう、今後も支援していきます。

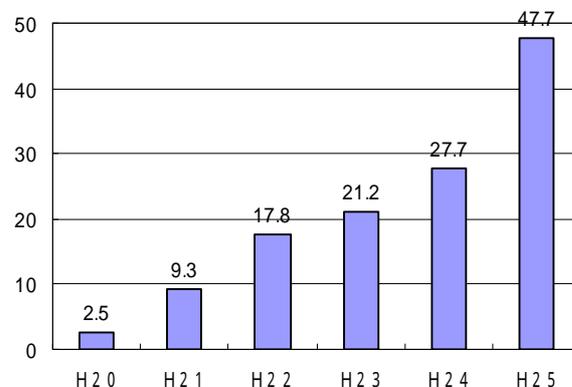


図1 はなふじ米面積の推移(ha)